

佐久市埋蔵文化財調査報告書第 308 集

宮の上遺跡群
宮の上遺跡Ⅷ

2024.3

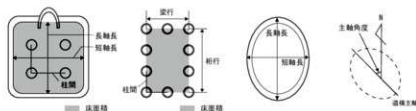
佐久市教育委員会

例言

- 1 本書は有限会社田園不動産による宅地造成工事に伴う宮の上遺跡Ⅶの発掘調査報告書である。
- 2 事業主体者 有限会社田園不動産
- 3 調査主体者 佐久市教育委員会
- 4 遺跡名及び所在地 宮の上遺跡群 宮の上遺跡Ⅶ (YMMⅦ) 長野県佐久市根々井字南辰ノ口 210-1、211
- 5 調査期間及び面積 宮の上遺跡Ⅶ 発掘調査期間：令和5年5月8日～令和5年5月18日
整理作業期間：令和5年5月19日～令和6年3月
面積：300㎡
- 6 調査担当者 松下 友樹 小林 眞寿
- 7 本書の編集・執筆は松下が行った。
- 8 本調査において出土した遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡例

- 1 遺構の略称は次のとおりである。 H－竪穴住居址 F－掘立柱建物址 D－土坑 P－ピット
- 2 遺構断面図の標高は遺構ごとに統一し、スケールバー上に値を示した。
- 3 遺構の計測値は以下の値である。



- 4 スクリーントーン表示は以下のとおりである。



- 5 遺物の実測図番号と写真番号は対応し、特に記載のないものは縮尺1/4で掲載した。
- 6 本書で示した方位は真北であり、座標値は世界測地系に準拠している。
- 7 遺構計測表及び遺物観察表における()は推定値を、〈 〉は残存値を示す。

目次

例言	第II章 遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・ 2
凡例	第1節 遺跡の環境と周辺の発掘調査・・ 2
目次	第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・ 3
第I章 発掘調査の経過・・・・・・・・ 1	第3節 基本層序・・・・・・・・・・ 3
第1節 調査にいたる経緯・・ 1	第III章 遺構と遺物・・・・・・・・・・ 4
第2節 調査組織・・・・・・・・ 1	写真図版
第3節 調査日誌・・・・・・・・ 1	
第4節 遺構・遺物の概要・・ 1	

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

宮の上遺跡群は、佐久市北部中央の根々井・横和・三河田地籍に所在する縄文時代から平安時代までの複合遺跡である。北側には湯川、南側には千曲川および行津川があり、複数の河川に挟まれた東西に伸びる台地上に立地、標高は769mを計る。

今回、宮の上遺跡群内で有限会社田園不動産による宅地造成工事が計画されたことにより、遺構の試掘調査を令和5年1月12～13日に実施した。その結果、平安時代の竪穴住居址が確認された。保護協議の結果、道路建設部分の遺構について、記録保存を目的とした本調査を実施することとなった。

第2節 調査組織

佐久市教育委員会	教育長 吉岡 道明
事務局	
社会教育部長	土屋 孝（～令和4年度） 依田 誠（令和5年度～）
文化振興課長	中沢 栄二
文化振興課企画幹	井上 剛
文化財調査係長	山本 秀典
文化財調査係	富沢 一明 上原 学 小林 眞寿 久保 浩一郎 松下 友樹
調査担当者	松下 友樹 小林 眞寿
調査員	岩松 茂年 小林 喜久子 小林 敏雄 宮川 真紀子 副島 充子 山村 容子 油井 洋一 元木 美里 常田 智弘

第3節 調査日誌

令和4年度	
11月30日	有限会社田園不動産より文化財保護法第93条の届出を受理。
1月12日～13日	対象地で試掘調査を実施し、平安時代の竪穴住居址等確認。
令和5年度	
5月8日～18日	宅地造成道路建設部分300㎡について、記録保存のための本調査を実施。
5月19日～3月	出土遺物の整理作業及び発掘調査報告書作成作業を行う。

第4節 遺構・遺物の概要

遺構	竪穴住居址4軒（平安時代）、掘立柱建物址4棟、ピット24基
遺物	弥生土器、土師器（平安）、須恵器（平安）、灰釉陶器、石器（磨石・蔽石）、鉄製品

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の環境と周辺の発掘調査

佐久市は北に浅間山、東南に関東山地を構成する佐久山塊、南に八ヶ岳・蓼科山で三方が山に囲まれた標高700m前後の高原性地域である。佐久地域の中央を日本海に向かって北流する千曲川は、川上村の甲武信岳を源とし、多くの支流と合流しながら肥沃な段丘上の地形を発達させている。

佐久平は千曲川により南北に二分される。南側は蓼科・八ヶ岳山麓からの小河川により形成された扇状地や千曲川の沖積低地が広がり、河床礫層と沖積粘土層が主体となっている。北部は浅間火山岩類を基盤として、その上に浅間軽石流が厚く堆積している。この堆積物により河川の浸食を受けて形成されたいわゆる「田切り」地形が特徴的に発達し、箱型に切立った台地上に縄文時代以降の遺跡が数多く残されている。

宮の上遺跡は市域北側、佐久市根々井・横和・三河田地籍に所在する。浅間山南麓の末端部に位置し、浅間軽石流が北の湯川、南の滑津川の浸食により形成された「田切り」の台地上に位置している。本遺跡周辺では、浅間軽石流上部に軽石流二次堆積物の砂礫層、いわゆる「湯川層」が堆積しており、本遺跡はこの湯川層を基盤としている。



第1図 宮の上遺跡Ⅶ調査区全体図

第2節 歴史的環境

佐久盆地内に所在する遺跡の大半は、約13,000年前に堆積した浅間軽石流及び軽石流二次堆積物構成された地盤上にあるため、周辺に旧石器時代の遺跡を確認することはできない。本遺跡周辺についても例外ではなく、付近には縄文時代から中世までの遺跡が点在している。縄文時代の遺跡は希薄ではあるが、北東に位置する寺畑遺跡では縄文時代草創期の爪形土器が出土する。弥生時代中期後半になると本格的な居住が認められるようになり、北方を流れる湯川右岸では西一里塚遺跡や西一本柳遺跡といった弥生時代後期の遺跡が検出された。古墳時代になると一時遺跡は減少するが、中期後半以降再び増加する。本遺跡北東方向に所在する北西の久保古墳群からは多量の形象埴輪が出土、長野県内では珍しい例である。南方を流れる滑津川周辺には佐久市最大の円墳である三河田大塚古墳が存在し、その後奈良・平安時代にかけて本遺跡が所在する台地全体に集落が形成される。本遺跡北方、湯川左岸に位置する根々井芝宮遺跡もその一つで、奈良・平安時代の集落が検出されている。近年では2019年に本遺跡南西に位置する宮の上遺跡Ⅶの発掘調査がなされ、本遺跡と同様平安時代の住居址や掘立柱建物址が検出されている。中世になると湯川右岸に根井氏館跡や根々井東原館跡、南方滑津川右岸には今井城跡などの城館跡が存在する。

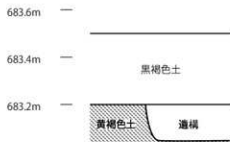


第2図 宮の上遺跡Ⅶ周辺の遺跡分布図

第3節 基本層序

本調査区の基本層序は、上位から黒褐色土、黄褐色土に大別される。黄褐色土は浅間軽石流の二次堆積物と考えられる地山で、本調査区ではこの地山上面で遺構を検出した。

地山は一部攪乱が及んでいるが、東から西にかけて地山検出面の標高が下がることから、旧地形は緩やかに傾斜していると考えられる。



第3図 基本層序模式図

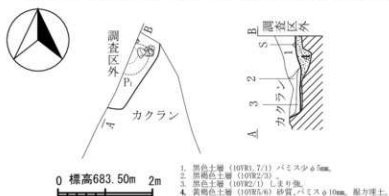
第三章 遺構と遺物

H1号住居址 (第4・5図)

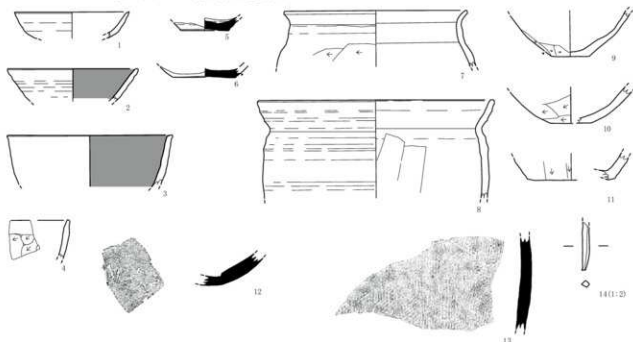
調査区東端に位置し調査区外に延びる住居址だが、大部分が攪乱により破壊されているため遺構の詳細が不明。検出面から床面までの深さは0.4mである。ピットが1基検出されており、床面は砂質である。

遺物は土師器・須恵器の杯・甕を主体としており、土師器の甕については武蔵甕が一定数認められる。1・2・4は土師器の杯であり、2については内面にミガキと黒色処理が施されている。3は土師器の鉢であり、内面にミガキと黒色処理が施されている。5・6については須恵器の杯で、いずれも底部に回転糸切痕が認められる。7～11は土師器の甕であり、8はロクロ甕、7・9・10は武蔵甕である。8・10はカマド内から出土した。12の須恵器片は壺だと考えられ、13については大型須恵器甕の一部である。14は鉄製品で角軸と考えられる。

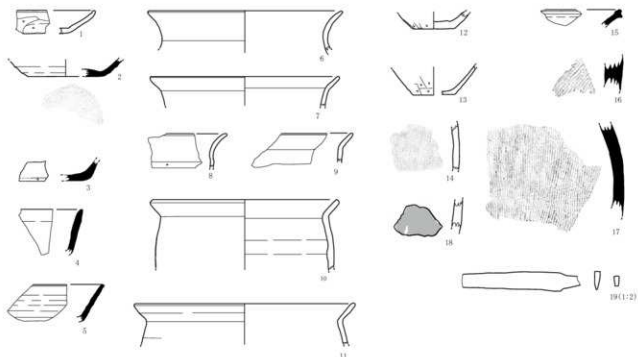
これらの出土遺物から、本址は9世紀前半の所産と考えられる。



1/80
第4図 H1号住居址遺構図



第5図 H1号住居址遺物図



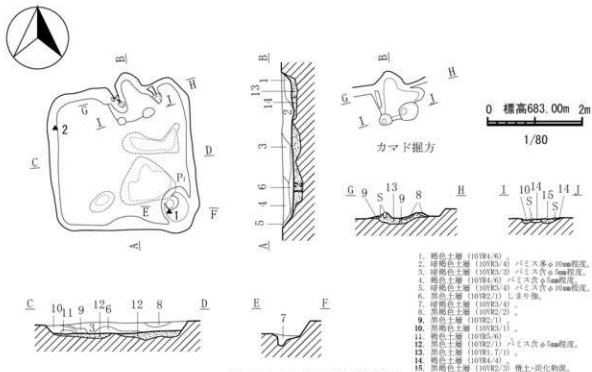
第7図 H2号住居址遺物図

H3号住居址（第8・9図）

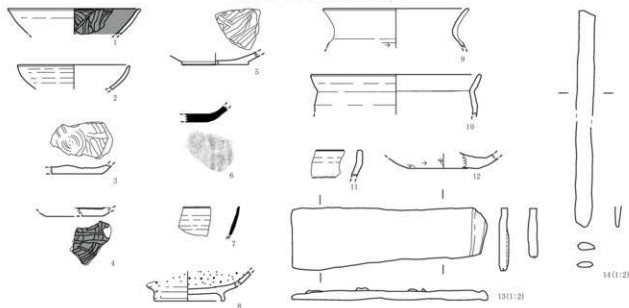
調査区南西端に位置する住居址。北側にはカマダが検出される。長軸2.55m、短軸2.44m、面積7.21㎡を計るおおよそ正方形の住居址である。検出面から床面までの深さは0.30m。主軸はN-15°-Wである。床面は黒色土である。覆土、床、掘方土中にははφ5～10mm程度のバミスが含まれている。南東に深さ0.24m程度のビットが1基検出されており、ビットからは鉄製品が出土している（▲1遺物図14）。カマダは角礫や亜円礫を主体に構築されており、粘土は残存していなかった。

遺物は土師器・須恵器の杯を主体とする。1～4は土師器の杯であり、3・4の底部に回転糸切痕が認められる。4の内面にはミガキと黒色処理が施され、放射状の暗紋が確認できる。5は土師器の鉢と考えられる。6・7は須恵器の杯である。8は灰釉陶器の椀であり、高台が貼り付けられている。9～12は土師器の甕である。13は鎌であり、14は鐵だと考えられる。

これらの出土遺物から、本址は9世紀後半の所産と考えられる。



第8図 H3号住居址遺構図



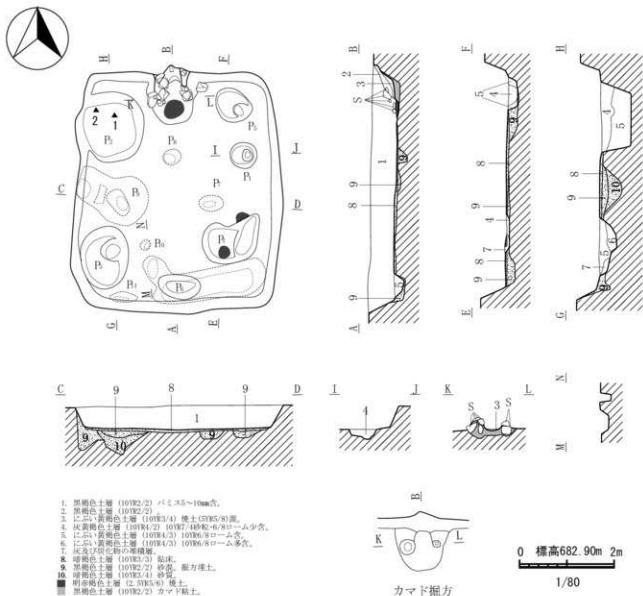
第9図 H3号住居址遺物図

H4号住居址 (第10・11・12図)

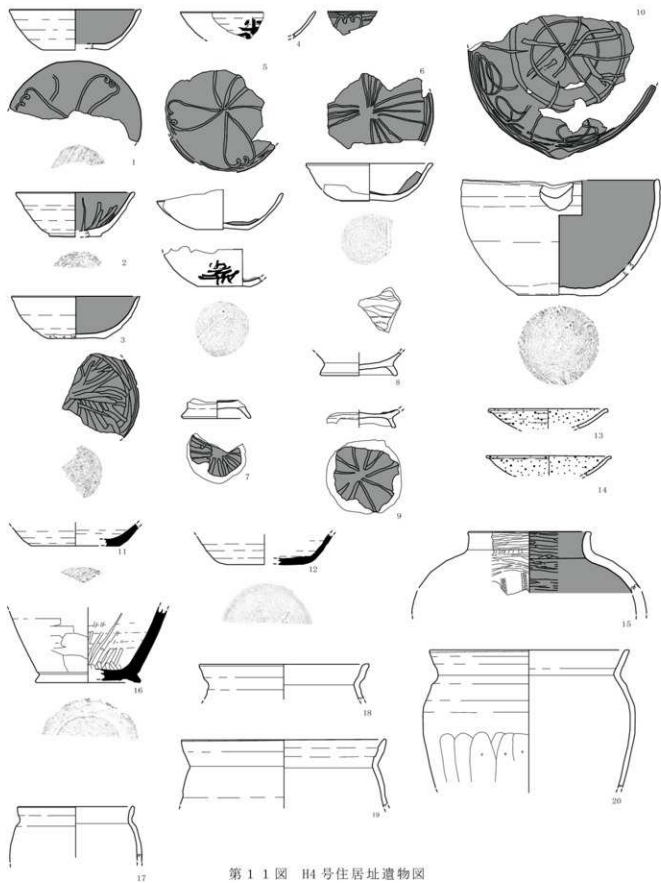
調査区西側中央、H3号住居址の北側に位置する住居址。北側にはカマドが検出される。長軸4.43m、短軸3.33m、面積17.69㎡を計る方形の住居址である。検出面から床面までの深さは0.63m。主軸はN-2°-Wである。床面は暗褐色の貼床である。覆土φ5~10mm程度のパミスが含まれている。住居址からはビットが6基検出されており、南側中央のビット(P6)は出入口に利用されたものと考えられる。北西端のビット(P2)からは鉄製品が2点出土している(▲1▲2遺物図36・34)。カマドは角礫や垂円礫を主体に構築されており、一部で粘土が残存している。カマド中央からは焼土が検出されている。

遺物は土師器の杯・甕を主体とする。1～6は土師器の杯であり、いずれも内面に黒色処理と暗紋が施されている。また4・5に関しては外面に墨書が認められる。7～9は土師器の有台杯で、いずれも内面に暗紋が施されている。10は土師器の鉢であるが、内面に黒色処理と暗紋が施されている。11・12は須恵器の杯である。13・14は灰軸陶器で、13が皿、14が椀である。15は土師器の壺で、内面に黒色処理がなされている。16は須恵器の壺と考えられる。17～20・25は土師器の甕であり、多くが遺構内カマド付近から出土している。21～24は土師器の甕であり、口縁部の形状と外面の縦ハケ目から甲斐型土師器の甕と考えられる。甲斐型の甕は口縁部の形状から、およそ9世紀～10世紀のものと考えられる。26は須恵器の甕、27は須恵器の羽釜である。28は台石と考えられ、29～31は磨石、32・33は敲石と考えられる。34～36はいずれも鉄製品で、34は角軸、35が角釘、36は鉄サイと考えられる。

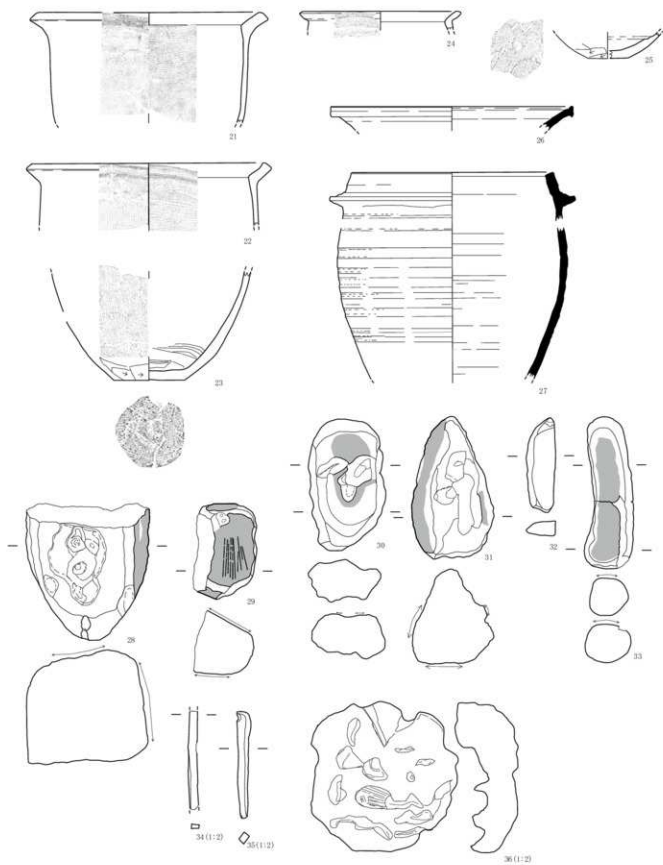
これらの出土遺物から、本址は10世紀前半の所産と考えられる。



第10図 H4号住居址遺構図



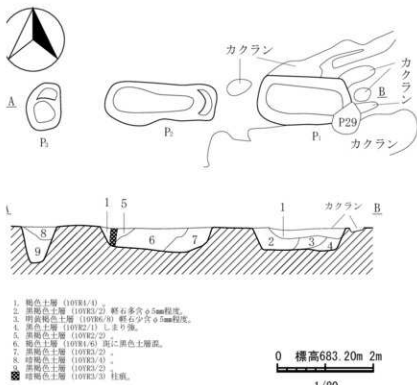
第 1 1 图 H4 号住居址遗物图



第 1 2 图 H4 号住居址遺物図

F1号掘立柱建物址(第13図)
 調査区東側、H1号住居址の南側に位置する。一部攪乱に切られているため詳細が不明だが、東西5.66m、柱間は2.40～3.27mである。P2では柱痕が確認できる。本址南側にはF2号掘立柱建物跡がある。

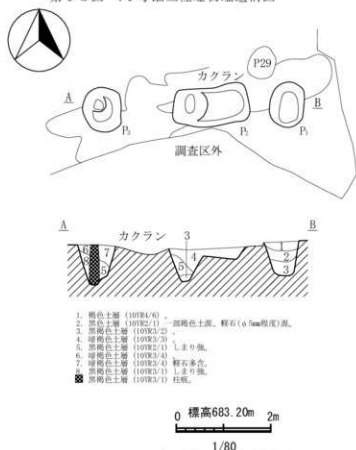
本址からは遺物が出土しなかったため時期は不明だが、周囲の竪穴住居址と同時期に位置づけられるものと考えられる。



第13図 F1号掘立柱建物址遺構図

F2号掘立柱建物址(第14図)
 調査区東側、H1号住居址の南側に位置する。一部攪乱に切られているため詳細が不明。東西4.03m、柱間は1.94～2.10mである。P3では柱痕が確認できる。本址北側にはF1号掘立柱建物跡がある。

本址からは遺物が出土しなかったため時期は不明だが、周囲の竪穴住居址と同時期に位置づけられるものと考えられる。

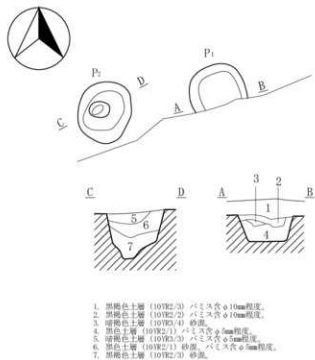


第14図 F2号掘立柱建物址遺構図

F3号掘立柱建物址（第15図）

調査区南側中央に位置する。P23を切る。南西側が調査区外に延びるため全容は不明。柱痕は確認できなかった。

本址からは遺物が出土しなかったため時期は不明だが、周囲の竪穴住居址と同時期に位置づけられるものと考えられる。



1. 黒褐色土層 (101R2/3) パシス穴φ10mm程度。
2. 黒褐色土層 (101R2/2) パシス穴φ10mm程度。
3. 暗褐色土層 (101R3/4) 砂質。
4. 黒色土層 (101R2/1) パシス穴φ5mm程度。
5. 暗褐色土層 (101R2/3) パシス穴φ5mm程度。
6. 黒色土層 (101R2/1) 砂質、パシス穴φ5mm程度。
7. 黒褐色土層 (101R2/3) 砂質。

0 標高683.00m 2m

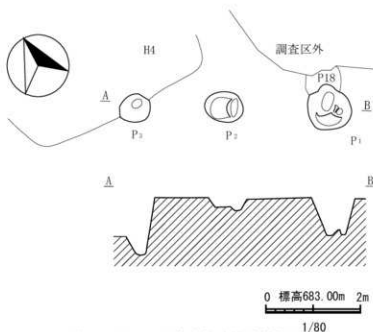
1/80

第15図 F3号掘立柱建物址遺構図

F3号掘立柱建物址（第15図）

調査区西側、H4号住居址南東に位置する。H4・P18に切られる。柱痕は確認できなかった。

本址からは遺物が出土しなかったため時期は不明だが、周囲の竪穴住居址と同時期に位置づけられるものと考えられる。



0 標高683.00m 2m

1/80

第16図 F4号掘立柱建物址遺構図

遺構番号	種別	部種	計 量 (cm)			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		指定級() 保存級()					
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	素材	内 面		外 面				
相 1	土師器	杯	(12.2)	-	(2.8)	ナブ	スス付着	コクロナダ	スス付着	完全実部			
相 2	土師器	杯	(13.8)	-	(3.5)	ミガキ黒色処理		コクロナダ		陶製実部			
相 3	土師器	鉢	(17.6)	-	(5.5)	ミガキ黒色処理		コクロナダ	ミガキ	陶製実部			
相 4	土師器	杯	-	-	(4.1)	ナブ		コクロナダ	ヘラケズリ	鏡片実部			
相 5	須恵器	杯	-	-	5.1	(1.4)	コクロナダ		コクロナダ	遮蓋印転糸切り	完全実部		
相 6	須恵器	杯	-	-	6.6	(1.2)	コクロナダ		コクロナダ	遮蓋印転糸切り	完全実部		
相 7	土師器	武蔵壺	(19.7)	-	(5.4)	コクロナダ		コクロナダ	ヘラケズリ	完全実部			
相 8	土師器	コクロ壺	(24.8)	-	(16.4)	コクロナダ	ハケナダ	コクロナダ	コクロナダ	陶製実部	カマド		
相 9	土師器	武蔵壺	-	-	(3.9)	(4.9)	ナブ		ヘラケズリ	完全実部			
相 10	土師器	武蔵壺	-	-	(4.4)	(3.9)	ナブ		ヘラケズリ	陶製実部	カマド		
相 11	土師器	壺	-	-	(8.2)	(2.9)	ナブ		ヘラケズリ	陶製実部			
相 12	須恵器	甕	-	-	(3.3)		コクロナダ		ハケ目	鏡片実部			
相 13	須恵器	壺	-	-	(9.9)		ナブ		タタキ	鏡片実部			
相 14	土師器	杯	-	-	(2.4)		ナブ		ヘラケズリ	鏡片実部	検出		
相 2	須恵器	杯	-	-	(1.8)		摩耗		コクロナダ	遮蓋印転糸切り	陶製実部	P1ホリ	
相 3	須恵器	杯	-	-	(2.3)		コクロナダ		コクロナダ		鏡片実部	検出	
相 4	須恵器	有台杯	-	-	(4.8)		コクロナダ		コクロナダ	遮蓋ヘラケズリ	鏡片実部	II区	
相 5	須恵器	有台杯	-	-	(3.9)		コクロナダ	摩耗	コクロナダ	摩耗	鏡片実部	II区	
相 6	土師器	武蔵壺	(29.6)	-	(4.5)	コクロナダ		コクロナダ		陶製実部	II区		
相 7	土師器	壺	(29.0)	-	(3.1)	コクロナダ		コクロナダ		陶製実部	IV区		
相 8	土師器	小壺	-	-	(3.4)	コクロナダ		コクロナダ	ヘラケズリ	鏡片実部	IV区		
相 9	土師器	壺	-	-	(3.3)	コクロナダ		コクロナダ		鏡片実部	IV区		
相 10	土師器	壺	(29.0)	-	(7.5)	コクロナダ→コクロナダ		コクロナダ→コクロナダ		陶製実部	II区		
相 11	土師器	壺	(26.4)	-	(4.3)	コクロナダ→コクロナダ		コクロナダ→コクロナダ		陶製実部	P1ホリ		
相 12	土師器	壺	-	-	(4.4)	(1.8)	ヘラケズリ		ヘラケズリ	陶製実部	IV区		
相 13	土師器	壺	-	-	(4.4)	(3.1)	ナブ		ヘラケズリ	陶製実部	P1ホリ		
相 14	土師器	壺	-	-	(4.9)		ハケ目		ハケ目	鏡片実部	II区		
相 15	須恵器	甕	-	-	(1.7)		コクロナダ		コクロナダ	鏡片実部	II区		
相 16	須恵器	壺	-	-	(3.6)		あて具痕		タタキ	鏡片実部	II区		
相 17	須恵器	壺	-	-	(14.8)		ナブ		タタキ	鏡片実部	P2ホリ		
相 18	弥生	甕	-	-	(3.1)		剥離		剥離	鏡片実部	II区		
相 1	土師器	杯	(14.0)	-	(2.4)	ミガキ 黒色処理		コクロナダ		陶製実部	II区		
相 2	土師器	杯	(12.6)	-	(2.4)	コクロナダ		コクロナダ		陶製実部	検出		
相 3	土師器	杯	-	-	(5.4)	(1.8)	ミガキ		ナブ	遮蓋印転糸切り	スノコ痕あり	鏡片実部	II区
相 4	土師器	杯	-	-	(6.0)	(6.9)	ミガキ 緑紋 黒色処理		ナブ	遮蓋印転糸切り	陶製実部	IV区	
相 5	土師器	鉢	-	-	(8.6)	(1.2)			遮蓋印転糸切り		陶製実部	II区	
相 6	須恵器	杯	-	-	(1.7)		ナブ		コクロナダ	遮蓋ヘラケズリ	鏡片実部	II区	
相 7	須恵器	杯	-	-	(3.8)		コクロナダ		コクロナダ		鏡片実部	II区	
相 8	灰輪陶器	椀	-	-	7.4	3.2	施釉(ハケ塗)		高台貼付	施釉	完全実部	II区	検出
相 9	土師器	小壺	(15.4)	-	(4.2)	コクロナダ		コクロナダ		剥離	遮蓋ヘラケズリ	完全実部	IV区
相 10	土師器	壺	(18.0)	-	(4.3)	コクロナダ		コクロナダ→コクロナダ		陶製実部	検出		
相 11	土師器	壺	-	-	(2.9)		コクロナダ		コクロナダ→コクロナダ		鏡片実部	検出	
相 12	土師器	壺	-	-	(7.4)	(1.4)	加脂ナブ		ヘラケズリ	遮蓋ナブ	陶製実部	II区	
相 1	土師器	杯	(14.0)	-	(6.8)	(4.3)	コクロナダ→緑紋 黒色処理		コクロナダ	緑紋	コクロナダ	遮蓋手持ちヘラケズリ	陶製実部
相 2	土師器	杯	(12.6)	-	(5.6)	(4.8)	黒色処理 放射状緑紋		コクロナダ	遮蓋印転糸切り	陶製実部		
相 3	土師器	杯	(13.6)	-	(6.9)	(4.5)	黒色処理 緑紋		コクロナダ	下下部手持ちヘラケズリ	陶製実部		
相 4	土師器	杯	(14.2)	-	(2.8)		黒色処理 緑紋		コクロナダ	遮蓋印転糸切り(緑線手持ちヘラケズリ)	陶製実部		
相 5	土師器	杯	(13.4)	-	5.8	(4.3)	緑紋 黒色処理		コクロナダ	黒色	コクロナダ	遮蓋手持ちヘラケズリ	完全実部
相 6	土師器	杯	(13.6)	-	5.6	(4.9)	緑紋 黒色処理		遮蓋印転糸切り	コクロナダ	完全実部		
相 7	土師器	有台杯	(6.2)	-	7.5	(1.9)	黒色処理 緑紋		コクロナダ	遮蓋印転糸切り	完全実部		
相 8	土師器	有台杯	-	-	(8.2)	(2.5)	ミガキ 緑紋		コクロナダ	高台貼付	陶製実部		
相 9	土師器	有台杯	(7.8)	-	(7.4)	(1.9)	黒色処理 ミガキ 緑紋		コクロナダ	遮蓋印転糸切り(高台貼付)	陶製実部	完全実部	
相 10	土師器	片口付き鉢	(20.8)	-	8.4	(2.3)	コクロナダ 黒色処理 緑紋		コクロナダ	遮蓋印転糸切り	完全実部		
相 11	須恵器	杯	-	-	(9.2)	(2.5)	灰輪痕	コクロナダ		コクロナダ	遮蓋印転糸切り	完全実部	
相 12	須恵器	杯	-	-	(8.6)	(3.2)	コクロナダ	足込外周摩耗	コクロナダ	遮蓋印転ヘラケズリ	陶製実部		
相 13	灰輪陶器	皿	(12.6)	-	(2.2)		施釉		コクロナダ→施釉		陶製実部		
相 14	灰輪陶器	椀	(13.2)	-	(2.1)		コクロナダ→施釉		コクロナダ→施釉		陶製実部		

第1表 遺物観察表1

遺構番号	種別	部種	計 量 (cm)			築造材	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		推定値() 残存値()
			口幅(表)	底幅(幅)	部高(厚)		内 面	外 面	
34-15	土師器	竈	(14.5)	-	(18.5)	ヒガキ 黒色粘土	ヒガキ 黒色粘土 タタキ目	羽黒実器	
34-16	須恵器	竈	-	(11.2)	(8.0)	コクロナダ→ヒガキ	コクロナダ→ヘラナダ 高台貼付	羽黒実器 P5	
34-17	土師器	甕	(12.4)	-	(3.4)	コクロナダ→ヨコナダ	コクロナダ→ヨコナダ	羽黒実器 P5 Ⅱ区	
34-18	土師器	甕	(18.0)	-	(3.8)	コクロナダ→ヨコナダ	コクロナダ→ヨコナダ スス付着	羽黒実器 カマド	
34-19	土師器	甕	(21.6)	-	(7.3)	コクロナダ→ヨコナダ	コクロナダ→ヨコナダ	羽黒実器 Ⅱ区	
34-20	土師器	甕	(21.1)	-	(14.6)	コクロナダ→ヨコナダ	コクロナダ→ヨコナダ	羽黒実器 カマド Ⅳ区	
34-21	土師器	早産型甕	(23.5)	-	(11.8)	黒割土 黒色粘土製	黒ハケ目 横ナダ	羽黒実器 P1 Ⅱ区	
34-22	土師器	早産型甕	(24.3)	-	(6.6)	黒ハケ目 横ナダ	黒ハケ目 横ナダ	羽黒実器 Ⅰ・Ⅱ区 カマド	
34-23	土師器	早産型甕	-	7.5	(11.6)	ヨコナダ	黒ハケ目	完全実器 Ⅳ区 カマド	
34-24	土師器	早産型甕	(16.0)	-	(2.0)	コクロナダ	黒ハケ目 →ナダ	羽黒実器 Ⅱ区	
34-25	土師器	甕	-	4.0	(2.8)	ナダ	ヘラケズリ 黒割土貼り	羽黒実器 Ⅳ区	
34-26	須恵器	甕	(24.9)	-	(2.4)	コクロナダ	コクロナダ	羽黒実器 輸出	
34-27	須恵器	須恵	(21.4)	-	(22.4)	コクロナダ 黒化粘付着	コクロナダ→ナダ →ヒガキ	羽黒実器 Ⅰ区 カマド	

第2表 遺物観察表2

遺構No.	若 材	部 種	最大長さ	最大幅	最大厚	重 量	備 考	出 土 位 置
34-14	鉄製品	角軸	22.5	10.4	(4.1)		先端残存	
34-19	鉄製品	刀子	36.2	1.0	0.3		両端欠損	
34-13	鉄製品	鎌	10.4	3.2	3.0			
34-14	鉄製品	鎌	(11.4)	0.9	0.4		先端欠損	
34-28	石器	石斧	14.5	13.0	12.1	5320.0	焼熱あり 即有 スリ面 上部下面欠損	
34-29	石器	磨石	10.2	6.4	6.7	720.0	焼熱あり スリ面4 磨痕 縦打痕	カマド裏方
34-30	石器	磨石	14.0	8.1	4.6	310.0	スリ面2	
34-31	石器	磨石	15.2	8.7	10.0	490.0	焼熱なし スリ面3 縦打痕2	
34-32	石器	磨石	10.1	3.1	1.6	80.0	焼熱なし 縦打面	
34-33	石器	磨石	16.1	5.0	4.1	150.0	焼熱なし スリ面1 打痕1 一部欠損	
34-34	鉄製品	角軸	(5.2)	(0.4)	(0.2)		両端欠損	
34-35	鉄製品	角釘	5.7	0.5	0.4			P11 北側
34-36	鉄製品	鉄ナシ	8.0	7.5	3.1		木材付着	

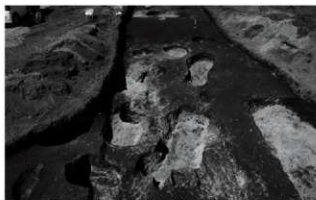
第3表 遺物観察表3



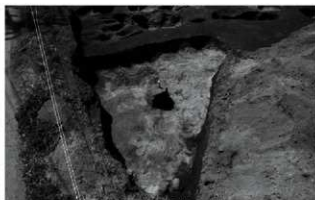
調査区東側完掘状況（西から）



調査区北側完掘状況（南西から）



F1号F2号掘立柱建物跡完掘状況(東から)



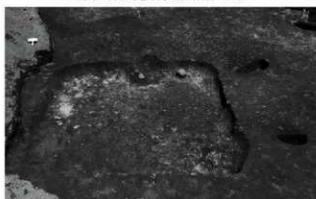
H1号住居址完掘状況(北から)



H2号住居址完掘状況(南から)



H2号住居址カマド完掘状況(南から)



H3号住居址完掘状況(南から)



H3号住居址カマド完掘状況(南から)



H4号住居址完掘状況(南から)

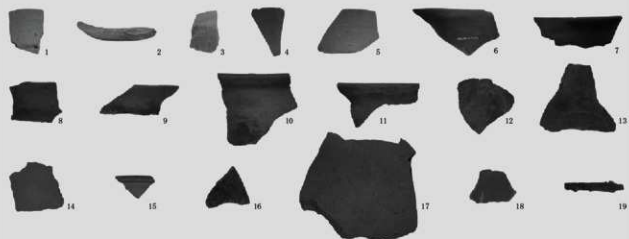


H4号住居址カマド完掘状況(南から)

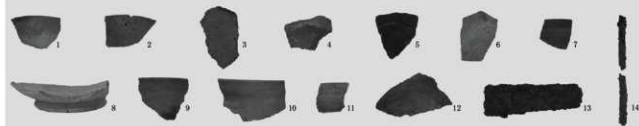
H1 号住居址出土遺物



H2 号住居址出土遺物



H3 号住居址出土遺物



H4 号住居址出土遺物



報告書抄録

ふりがな	みやのういせきぐん みやのういせきはち							
書名	宮の上遺跡群 宮の上遺跡Ⅶ							
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第308集							
編著者名	松下 友樹							
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込 2913 Tel:0267-63-5321 Fax:0267-63-5322							
発行年月日	令和6年(2024) 3月							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 積 面 (㎡)	調 査 原 因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
みやのういせきぐん みやのういせきはち 宮の上遺跡群 宮の上遺跡Ⅶ	さくしねおい 佐久市根々井 210-1、211	20217	240	36° 15' 26"	138° 27' 37"	20230508 ～ 20230518	300	宅地 造成
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮の上遺跡群 宮の上遺跡Ⅶ	集落址	平安時代	竪穴住居址 4軒 掘立柱建物址 4棟 ピット 24基	土師器、須恵器、灰軸陶器、 石製品、鉄製品				
要 約	佐久市北部の湯川左岸台地上に立地する平安時代の集落址である。9世紀～10世紀の竪穴住居址4軒のほか、同時期と思われる掘立柱建物址が4軒検出された。また、住居址からは「仁」「北条」などが墨書された土師器が出土した。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第308集

宮の上遺跡群 宮の上遺跡Ⅶ

令和6年(2024) 3月

編集・発行 佐久市教育委員会事務局

〒385-8501 長野県佐久市中込 3056

社会教育部 文化振興課文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込 2913

Tel:0267-63-5321

印刷所 キクハラインク株式会社